

巻頭言

生まれ変わり

現代宗教研究所長 三原正資

G S I X・葦屋書店のテーブルで、『桃紅一〇五歳 好きなものと生きる』（世界文化社 二〇一七）を開くと、巻頭、著者の書家篠田桃紅さんは、次のように述べている。

人は生きもので、死んだらそれまでです。

仏教などでは、生まれ変わると信じられていますが、もし生まれ変わることがあるとしても、宇宙のなかの一つの現象。前に生きていたときは全然関係なく生まれ、ああ再び会えてよかったでもなく、ああ懐かしい人だ、ということでもありません。

なんの関係もなくなっています。魂というものが、新しい体を得たとしても、一切に関係がなくなっています。

近世、文政年間の頃、「勝五郎生まれ変わり」事件があった。有名な出来事で、若い頃から私も知っていた。

ちょうど刊行されたばかりの『あの世』と『この世』のあいだ たましいのふるさとを探して』（新潮新書 二〇一八年一二月）には、著者の谷川ゆにさんがこの事件に一章を設けている。

日野市に伝わる「生まれ変わり」事件のあらまはは、次のようなものである。

文政五年（一八二二）十一月。武蔵国多摩郡中野村（現在の八王子市東中野）に住んでいた八歳の勝五郎は、実は自分の前世は、程久保村（現在の日野市程久保）の藤蔵という少年で、六歳の時に疱瘡（天然痘）で死んだのだと語った。

勝五郎の祖母が、程久保村のことを知っている人たちに聞いてみると、勝五郎が語った通り、確かに藤蔵の家は存在しており、当人はやはり疱瘡で亡くなっていたことが分かった。

こうして、この事件は大きく広がっていく。

ところで、私が驚いたことは、平成一八年に日野市郷土資料館の委託調査事業として「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」が発足し、「生まれ変わり」や郷土史・民俗学に興味のある人が参加し、成果をあげていることだった（参照 同調査団編 日野市郷土資料館ブックレット一『ほとくほ小僧 勝五郎 生まれ変わり物語』平成二八年）
平成二七年の勝五郎生誕二〇〇年記念事業には約三三〇〇人の参加があったという。ブックレットには次のように記されている。

私たちは、調査団の活動を通して、多くの人たちと交流することが出来、たくさんの事を学ぶ機会を得ることが出来ました。一つの事例を、様々な角度から眺めることによって、こんなにも豊かな世界が広がっていくことが体験できたことは、幸せなことではないかと思えます。

それにしても、なぜ、多くの人々がこの「生まれ変わり」事件に関心を示してきたのか。

小山聡子さんは『往生際の日本史』（春秋社 二〇一九）に

結局のところ、われわれ人間にとって最も恐ろしいものは死である。

と述べているが、「生まれ変わり」は「老いや病、死からなんとか逃れることはできないものかと求めてきた者たち」(同)、すなわち私たちの「夢」(同)にはかならないからであろう。

しかし、そのために、別の問題も生じる。

「勝五郎生まれ変わり物語」を紹介した谷川さんは、次のように指摘している。

そもそも、神とか死者とか霊魂といったたぐいの話というのは、たいへん書きにくく、また考える枠組みを持ちにくいジャンルであるように思う。読者もお察しのように、現代進行形でこういう話題を扱おうとすると、大抵は「靈感」だとか「見える人」だとか、「心靈現象」「神や霊魂の实在」などとといった怪しい語彙にからめとられて、いわゆるオカルト的な方向へと流れて行きやすい。(前掲書)

学術的立場に身を置く一般の研究者はそうかもしれない。では、私たち僧侶はどうか。

宗教学者山折哲雄氏はこの種の問題について次のように指摘している。

明治以降の仏教学者が靈魂を否定するようになったのは、彼らがイギリスやフランスやドイツに留学して、西洋の近代主義的な仏教解釈の洗礼を受けたからです。彼らが学んだのは、合理的な仏教だったわけです。そこでは靈魂の存在なんてことは、まったく紹介されていなかった。それぞれの問題が学問的に抹消されていた。

その結果、現代のお坊さんたちもまた、みんなその影響を受けているわけですから、何となしに靈魂を持ち出す

ような葬儀は、第二義的な宗教の機能であると思ひ込むことになった。仏教のあるべき姿はそんなところになどないのだというふうに教えられていたからです。（『宗教の自殺』P H P 一九九五）

臨死体験を研究するカール・ベッカー氏（京都大学大学院・政策のための科学ユニット特任教授）は次のように説明している。

現代の日本人は、臨死体験の存在を知ってはいても、死後に意識が存在するとは信じていない。この風潮には無理もない歴史的背景がある。キリスト教徒に対する踏み絵、仏教に対する再三にわたる廃仏毀釈、神道へのGHQの検閲、また新宗教の犯罪事件などによって、「宗教を信じてはならない」という教訓を、過去数世紀にもわたり、厳しく教わってきたからである。（『ブルーフ・オブ・ヘブン』〈解説〉ハヤカワ文庫 二〇一八）

とはいえ、この問題は「十二因縁」をどのように受け止めるかという、仏教を一貫する問題点であることに変わりはない。（参照『仏教論争―「縁起」から本質を問う』宮崎哲弥 ちくま新書 二〇一八）

宗祖は『兄弟鈔』に、池上兄弟について、

淨藏・淨眼の二人の太子の生れかはりてをはするか。葉王・葉上の二人か。（定遺九二九頁）

と述べられている。

当時の人々は、靈魂と他界の存在を確信していたにちがいない。宗祖の『守護国家論』には、「善導和尚は（略）弥陀の化身也。慈恩大師は十一面觀音の化身」（定遺一三四頁）と人々の心のありようを物語る記述がある。

現在、誕生寺がある宗祖生誕の地、小湊の人々は、当時、幼年の宗祖をどのように見たことだろう。善日磨は「釈迦の生まれ変わりか」ぐらいのことは言ったのではなからうか。そのような思いと期待が、青年期の宗祖の

日本第一の智者となし給へ。（『清澄寺大衆中』定遺一一三三頁）

という大志を育んだと考えてもよいだろう。

『頼基陳狀』には、信徒のことばとして

日蓮聖人は御經にとかれてましますが如くば、久成如来の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、後五百歳の
大導師にて御座候聖人（定遺一三五二頁）

という、合戦における鎌倉武士の名乗りにも似た表現がある。

だが、この文章は、「世尊の出世」と仰がれた良観への疑問の一節の中にあることに注目したい。当時の人々も、検討することもなく「生まれ変わり」を受け容れていたわけではないと思われる。そこで、宗祖は、自分が法華經の行者であるのか、それともないのかを詳細に考究した『開目抄』をあらわされたのであろう。

さて、宗教学者大田俊寛氏は、『現代オカルトの根源——靈性進化論』（ちくま新書 二〇一三）において、ヨーロッパの神智学、アメリカやイギリスのオカルティズム、そしてオウム真理教などの日本の新宗教を概観、検討した上

で、それらの宗教思想の根底にある「靈性進化論」Ⅱ「人間の靈は永遠に進化し続ける」という理論について、次のように述べている。

その理論が実際には、妄想の体系以外のものを生み出しえないということをもはや結論して良いと思われる。しかし、果たしてわれわれは、その思想を一笑に付して済ますことが許されるだろうか。それもまた、余りに一面的な短見と言わなければならぬだろう。なぜなら、宗教と科学のあいだに開いた亀裂、すなわち、科学的世界観や物質主義的価値観のみで社会を持続的に運営することが本当に可能か、長い歴史において人間の生を支え続けた過去の宗教的遺産を今日どのように継承すべきかといった、靈性進化論を生み出す要因となった問題は、根本的な解を示されないまま、今もなおわれわれの眼前に差し向けられているからである。

この結論と提言の中には、私たちが宗祖の降誕八〇〇年をどのように迎えるのか、に内在する問題の一端が示されていると思う。

さて、宗祖は

一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり。不輕菩薩の人を敬ひしはいかなる事ぞ。教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ。（『崇峻天皇御書』定遺一三九七頁）

日蓮はわるき者にて候へども、法華經はいかでおろかにおはすべき。ふくろはくさけれどもつゝ、める金こがねはきよし。（『西山殿後家尼御前返事』定遺一九〇二頁）

等と述べられて、その宗教的行動の社会への責任や深く謙虚な自己省察を語っていたことは、宗祖の宗教世界の重層性を示している。決して単純な自己肯定感によって支配されていたわけではない。

このように、「久成如来の御使、上行菩薩の垂迹」と自覚した人が、「出世の本懐は人の振舞」、自己を「わるき者」と語ったことは、宗祖が、宗教者がしばしば陥る「妄想の体系」（『現代オカルトの根源』）を離れていたことを示している。

平成三〇年度教化学研究発表大会で講演したブラユキ・ナラテボー師も、仏教のもつ「戒定慧」の三つの修行様式を循環的に考え（『脳と瞑想』サンガ新書 二〇一六）、仏教をシステムとして総合的に実践することの大切さを強調した。

「生まれ変わり」を語った勝五郎少年は、その後、普通の人生を送り、今も、関係者は健在であるという。篠田桃紅さんが語るように、生まれ変わりは今の人生とは何の関係がないにしても、生命誌研究家中村桂子さんは、太古からの生命の連なりに感動すると言う。

まもなく宗祖降誕八〇〇年を迎える。今一度、いのちの連なりについて考えてみようではないか。